

虚子能楽関係年譜（稿）

キー・ワード…能、高浜虚子、俳句

三 村 昌 義

本稿は、近代俳句の巨匠、高浜虚子と能楽とのかかわりについで年譜である。虚子の家柄は、旧幕時代、伊予松山藩の演能に深くかわり、虚子の祖父に当たる高浜高年は江戸留守居役を勤めた頃に、宝生新之丞について下懸宝生流を習い、高年が筆写した謡本は、後に下懸宝生流の版本ができた時の原本となったように、虚子は宗家宝生新の署名による序文を、内々に執筆したとも伝えられている。^①

明治三十五年、祖父、父の後を承けて、松山での演能の世話役を引き継いでいた、虚子の中兄、池内信嘉は、下懸宝生流から喜多流に転じ、明治三十五年四月、能楽復興の志を抱いて上京、同年九月、雑誌「能楽」を発行し、維新後、退転していた能楽の復興に尽くした。虚子もまた幼児から能に親しみ、以下の年譜に明らかなように、自身何番も能を舞い、また大小の鼓も打

つほどの腕前で、いくつかの新作能も書いている。また夏目漱石に謡を進めたのも虚子なのである。

さて、それらの新作能はもちろんのこと、虚子の本業である俳句、あるいは小説、写生文などにも、能の手法、ことに能のワキの視点が大きなポイントになっていることは、しばしば指摘されている。^② そういう虚子と能楽との関係を、虚子の年譜を通して明らかにすることは、なかなか困難なことではあるが、しかし、同じ年にどういう作品を発表し、能についてどんな発言をしているかということとを相関的に追ってみることは、決して無駄なことではないはずである。以下の年譜は、主に「能楽」に連載された「謡曲放談会」の記事を中心に、長い発言は、虚子の創作とかかわりの深いと思われる部分のみを、私に抄出した。当時の新聞に掲載された、虚子の筆による能評など、多々、

遺漏はあると思うが、大方のご叱正を得て、補完してゆきたいものと考えている。

なお、本稿は、平成九年九月二十七日、柿衛文庫にて開催された大阪俳句史研究会での発表レジュメをもとに、加筆訂正したものであることを、お断りしておく。

未生以前

明治四年

一月、父、池内庄四郎、藩主新邸造営記念能に地頭を拝命。このころ、藩主久松家は伝来の能面を、青山御所に献上。三の丸にあった能装束売り払いと聞き及んだ庄四郎は、払い下げを願い出て、太政官札三百五十円で買い受ける。

二月、吉田屋敷跡に仮舞台を作り、晴天五日の勸進能（観覧料一分△二五銭▽）を催す。

明治七年～十三年　〇～六歳（以下、年齢は満年齢）

父、池内庄四郎、東雲神社の春秋の能の地頭を勤める。

明治十六年　九歳

東雲神社の演能の時は、春は梅の花が風のままに散り、秋はとんぼが飛び、榎の実が雨のように降ったと記憶。父の楽屋に弁当を届ける。

明治十八年　十一歳

父に『烏帽子折』を習う。

明治二十四年　十七歳

三月、父、没。

五月、子規に碧梧桐を介して書簡を送り、文学の指導を乞う。

六月、帰省した子規に会う。以後、月一回程度、句会を持つ。

十月、虚子の号を用いる。

明治二十七年　二〇歳

七月、下宝生流家元、宝生新朔松山へ赴き、虚子、碧梧桐らに五十日余り指導。

九月、仙台第二高等学校へ転校、すぐに退学。

明治二十八年　二二歳

四月、松山で漱石と会う。

五月、日清戦争従軍帰還中、子規咯血。須磨の病院へ入院、看病。

十月、「日本」に「句罪人」のペンネームで「俳話一束」を四回連載。狂言『蘭罪人』によるペンネームか。

十二月、「日本人」に「俳話」を載せ、『羽衣』に触れる。

明治三〇年 一三歳

一月、柳原極堂によつて「ほと、ぎす」創刊。

六月、大畠いとと結婚。

明治三一年 二四歳

十月、「ホトトギス」を東京へ移す。

十一月、母、柳、没。

明治三五年 二八歳

四月、中兄、池内信嘉、能楽維持、振興の志を抱いて

上京。（二八日）

子規庵で謡会を催す。（三〇日）

五月、虚子宅にて謡会を催す。（七日）

七月、池内信嘉、雑誌「能楽」を発行。（大正九年まで

続刊）

九月、子規、没。

十一月、「能楽」に「謡曲羽衣」（起草は明治二九年頃）

を掲載。

△我美観を刺激し長く印象を拭ひざる能はざる
或ものあるか如きと覚ゆるは何ぞや。（中略）曰、
我三保の松原に天女に遇ふと。嗚呼天女とは何

物ぞや。舞ひ上りし菅笠か、降り来りし羽衣か、

天か地か、霞か人か。答ていふものあり、これ

人間の神走せて山川の霊を迎へ色あり声あり霊

香薫するものと。私に思ふ我國の所謂神なるも

のは多く天地を父とし人間の想像を母とするも

の。（中略）嗚呼白砂青松はこ、に霓裳羽衣の天

女を生み、又こ、にはくれうといふ漁夫を住ま

はせ、こ、に一篇の叙情的叙景詩を作らしめし

ものといふべし。（中略）或物とは何ぞや。曰風

景の美これなり。羽衣はまた一の叙景詩として

三保の松原より其神を捕へ来り、其の風景の美

を伝ふるもの。豈啻に羽衣のみならんや、風景

の美は謡曲に一貫するところの趣味なり。（中略）

嗚呼羽衣は三保の浦回の松に立つ陽炎か、天女

は霞をもる、雲雀の声か、這般の着想をもつて

誰か未来の叙景詩人たるものぞ。✓

宝生会月並能において、『百万』のワキを勤める。

（シテは松本長）

明治三六年

四月、宝生会月並能において、『鞍馬天狗』のワキを勤

める。（シテは松本金太郎）

十月、小川町観世舞台において、『絃上』のワキを勤め

る。（シテは観世清廉）

明治三十七年

三〇歳

五月、

「能楽」誌上に、第一回「謡曲放談会」記事（『隅田川』について）掲載。

△謡の多くは古事記を始めとし源氏、伊勢、大和及其他各種の物語若くは戦記類を種として作つたものが多い。又中には支那の事柄より取りたるもの、或は又一首の歌を骨子として、一編の脚色を組み立てたものもある。其等の中に在つて、殆ど小説に近い、他のものとは截然として区別の出来る一種の著作がある。鉢の木、鳥追舟、及此隅田川などは此種に属する者である。物語類から出たもの若くは歌によつて脚色したもの（其他多くのもの）等が常に千篇一律の文字を繰りかへし、陳腐、浮華、無意味、冗長、趣向としても文章としても何の価値も無い（此種のもは僅に節奏によつて聞くに足る謡となり、楽器、舞踏等によつて見るに足る能となるのみ、文章としては屁の如き者のみ）中にあつて此種のものは斬然として頭角を現してゐる。第一、無用の文字が無い。（尠くとも他のものに比較して遙かに少い）第二、趣向が斬新だ。第三、小説めいた人事でありながら卑俗に陥らず高尚に出来てゐる。必ずしも謡曲といふものは此種の

もので無けりやならぬ、とはいはぬが、他のものが千篇一律、死文字を陳ねて模倣の外何物をも知らざる中に立つて確かに新活路を開いてゐる、新生命を保持してゐる。扱て之は何故であるか。察する所、恐く是等の作は比較の後世に出来たものであらう。さうして其材料は其各地方に存在してゐた口碑などから取つたものであらう。文学的趣味のある材料は今でも歴史などから取つて来たものでは無くて却て俗間の口碑や其他卑近な出来事に多い。近松門左衛門の成功した浄瑠璃が大概今の新聞の三面記事の類を種としたものに多く、失敗したやつは多く古戦記類などを材料としたものである事も全く此と同一の理由に基く者であらう。能楽は総て古式を重んじ優美高尚を貴ぶといふのであるが、しかし決して陳腐、浮華、死文字の行列を喜ぶべき理由は無い。其近松の作が時代物から段々世話物に進んで来て居るやうに謡曲の著作も曲舞の前後に駄文字をくつ、けて出来上りたものなどから漸々進歩して此種の方面に一大活歩を試まうとする迄にはなつたものであらう。即此種の作が謡曲に於ける進歩の行き留りを為してゐるのであらう。もし謡曲は此以上には進歩せぬ

ものであらうか、或は又何かの原因で仮りに歩を爰でとめてゐるのであらうか、其等は疑問であつて俄に断言する事は出来ぬが、兎に角此種のものが現在に於ける謡曲進歩の第一高峯に馬を立てゝゐるものである事は争はれぬ。さうして其中に在つても最も趣味深く完全に出来てゐるのは此隅田川である。▽

△三番物などに余情が無いとはいはぬ又趣味が無いとはいはぬが余情、趣味といふものはいふ人解する人によつて其字義が違ふ。僕等からいふと隅田川などといふものにこそ趣味も余情もあれ、源氏物などと来た日には余情どころか、殆ど没趣味の作が多いといつてよからうと思ふ。若し趣向が単純な程余情があるといふわけでもあるまいし、又浮華な文字が並んでさへゐれば趣味があるといふわけもあるまい。如何に謡曲は品格を貴ぶといつても仮りにも一種の戯曲である以上は変化も無けりやないかぬ趣味も無けりやないかぬ。又文学である以上は陳腐は許さぬ、浮華は禁物だ。わかりきつた事をくりかへしまさかへし冗長極まる文字で陳べたやつには余情は無い。屈折のある変化のある趣向を短い文字で現はしたやつにはじめて余情といふもの

はある。陳腐な趣向を文字で現はしたやつにはじめて趣味といふものはある。彼のいひ古し使ひ古した五文字を賤の小田巻くりかへしまさかへして古人の思想を其俶踏襲するのが優美な和歌の道と心得てゐる人の如き僕は全然文学美術を解せざるものとするのだ。源氏物が優美で趣味があるといふのも丁度陳腐な三十一文字を優美高尚とするのと同じ轍ではあるまいか。▽

五月、九月、宝生会月並能において、『源氏供養』のワキを勤める、（シテは野口政吉）

五月、十月、俳体詩「寺三題」、十一月、「尼」を漱石と試みる。

五月、同月、「謡曲放談会」で『黒塚』を論じる。

△黒塚一篇の主題とも見るべきものは作者が鬼に対する同情といふ事である。鬼といへば恐ろしいものこわいものといふ感じを起こすが人の常であるが、この一篇の作意は鬼も亦憐れむべきものである、決して現在の地位に安んじてゐるものではない、といふような感じが主になつてゐる。（中略）無暗に強がつて得意になつて人を食つてゐる鬼では無くて、前世の業因で止むを得ず人を食つてゐる、甚だ苦しい境界であると自覺もしてゐるのぢやが扱て自分で又其臆志

の焰を滅することも出来ぬ、といふやうな事が此作意の主眼であると思ふ。▽

△能樂趣味は能樂趣味で独立して居て他の者の侵す事を許さぬ所がある。私など今迄は能樂は改良して一転化を試みねば終に衰滅するだらうと思つてゐたが、此頃になつて此考はなくなつた。尤改良といふのも程度で時勢に適應する為め少々の改良は止むを得むが大体に於ては旧態を存する所が能樂の能樂たる所だ。油濃い文学が人に適するやうになると仰しやるのは間違ひではないが、併し油濃い文学ばかりでは人は満足しない。西洋料理許りで人が満足しないのと同じ事だ。油濃い文学が発達する程一方には淡泊な文学が益必要になつて来る。能樂は淡泊な文学芸術の代表者として全く廃滅する事はあるまいと思はれる。(中略)紡績場や蒸氣車のうちの美を歌ふには今日の新たらしい文学を待たねばならぬ。紡績場や蒸氣車を以て五百年前の能樂の材料とする事は思ひもよらぬ事ぢや。能樂は五百年前に生れた文学技芸として貴といひ、五百年前の人でなけりや作れぬものぢや。今日の人でも作れぬ事はあるまいが、作つたところで模倣に過ぎぬ。今日能樂の新作をのぞむなど

明治三八年

三三歳

七月、

『謡曲放談会』で『源氏供養』を論じる。

△何所とてつかまへ所のないつまらぬ作だと思ふ。▽

△紫式部が舞を舞ふといふ事は考へやうによつたら可笑しいが、能の舞といふやつは三味線、太鼓でお酌が舞ふ舞とは意味が違ふ。些くとも酒を飲んで浮れ舞では無い。数多の謡曲の中にはさういふ種類の舞もないでは無いが、此紫式部の舞の如きは扇を翳して舞台に三角形を描くといふ事の外殆ど何の意味も無いものである。全く無意味の一種の形式美たるに過ぎ無い。能の舞の貴といふ所は全く此処に在るのである。然

到底無理な注文ぢや。若しわくかせわで満足しないで紡績場や蒸氣車を材料としたいと思ふなら之を能樂にのぞまいで他の文学技芸にのぞむ方がよい。旧演劇に対して新演劇が起つたやうに旧能樂に対して新能樂を創設したらよからう。其代り旧能樂は何処迄も旧能樂として旧態を墨守するがよい。▽

五月、十一月、猿樂町、宝生舞台、別会能において、『阿漕』のワキを勤める。(シテは松本長)

九月

「能楽」において、能の形式美を強調する。

るにも拘らず原作者は其舞に無理に意味をつけて紫式部がお布施には何を差上げら善からうかと心配する、安居院の法印はお布施はいらぬから舞を見せてくれと請求する、其処ではづかしながらと紫式部が舞ふことにしてある。これでは理窟ッばくて俗臭紛々だ此一段を削り去つた上宝生は識見ありといふべしだ。▽

△次第といひ、一声といふ音楽上の一の形式に意味ありや。脇僧が橋掛りより出て来るといふ事と、大小鼓が次第を打つといふ事との事柄の上に何等かの意味の連続あるにや。余以為く事柄の上に何の意味の連続も無し。唯能楽なるもの、定まりたる形式に従ひ、先づ斯る節奏を以て聴者の耳に一の階調を与へ、其舞台の上の現実界に非ざるを認識せしめ置き、而して揚幕より脇僧を点出し来る。斯の如きのみ。次第には意味無し、唯耳に聴る一の形式美のみ。一声、出羽には意味無し、唯耳に聴る一の形式美のみ。クリ、サシ、クセには意味無し、唯耳に聴る一の形式美のみ。曲進行して観聴者の心は層一層融解し且つ歩一步興奮し来る。而して眼及び耳には更に何物をか要求せずんば止まざらんとす。

十月、

此時に於て笛声の加はるあり大小鼓は之に応じて一の節奏を為せば羽衣金扇翻つて舞台の上は一大形式美と化した了す。然り舞には意味無し、唯眼及び耳に聴る一の形式美のみ。然れども謡曲十中の八九は概ね舞を舞ふ原因に意味あり。是亦善し。然れども謡曲十中の二三は舞を舞ふ原因に意味無し。是亦善し。▽

「謡曲放談会」にて『景清』の詞章について発言。

△漢語らしい文字を使ふ時には、必ず立派な漢文にならなければならぬといふのは甚だ狭い考へで、漢学者の一癖であらうと思ひます。此所に純然たる漢詩などを持つて来ては文字は見事でも却て此場合の情景を写すのに適せん、元來漢語らしくて漢語でもなく、和文らしくて和文でもなく、漢語和語俗語をつき交ぜた其大胆な無頓着な処が謡曲の文章の特色で擬古文以外に卓然として地歩を占めて居る所以である。（中略）謡曲の文章の何処をたづねてさう立派な漢文や立派な和文が得られやう、却て其立派で無い漢文や立派で無い和文を大胆に織り交ぜた処が立派な謡曲的文章を創造し得た所以では無からうか。（中略）漢は漢、和は和と分れても其中間のものも有つて構はぬ、（中略）寧ろ此等の間の

十一月

子的文学が其時代の思想をうつし感情を描くのは恰好の文字である、成島柳北の文章は皆く漢字が使ひこなしてあるといふ点に長所があらう、併し今日の新聞記者の筆に比して果たして其思想を現はす上にも卓越して居るであらうか、今日の時代に在つて尚、成島柳北は文章家の主座を占め得るであらうかどうか、其は随分疑問ぢやと思はれる。▽

「謡曲放談記事」に『自然居士』について発言。

△世の中で普通能といふもの、些くとも能らしいといふものは、所謂神男女狂鬼の分類にしかとはまるものに限られて居る。男ものともつかぬが、狂ものともつかぬといふやうな者は能として極めて変則な者になつて居る。男ものといふのは二番目即修羅物に限るとすれば、此自然居士をはじめ、東岸居士、花月、放下僧、藤水、鉢木、鳥追舟、満仲、俊寛、景清等の類は何の部に入れてよいのか。普通二番目に入れなければ四番目に入れて居る。即ち修羅物の代役をさせなければ狂物の代役をさせて居る。この何物ともつかぬ一種の現在物は一方からいふと謡曲の継子であるが、他の一方からいふと寧ろ謡曲界に珍重すべき一大異彩である。(普通に曾我物

といつて居る類もこの種と同一類といつてよからう。) 扱是等の謡曲は文章としての価値は中につまらぬものも無いではないが総じて一生面を開いてゐる点に面白味がある。所謂神男女狂鬼にしつかりとあてはまるやつは上つ面は奇麗にあでやかにお道具揃ひに出来てゐても其精神に至りては何の特色も無く、何の活気も無く陳々腐々、必竟古い作を模倣した、唯一種の型にはまつて居る外なにの取柄も無いといふやうなものが多い。其等に比べると是等の作品は概ね生氣を帯びて居る、些くとも模倣品では無い創作品であるといふ事をいひ得る、殊に此自然居士の如きは其全体の趣向が頗る異類なものである上に、其の布置結構から其措辞の上に至る迄全く作者の創意になつてゐて、他の作品を模倣したやうな跡は殆ど見る事が出来ぬといつてよい。余は此作を読んで最愉快に最心強く感ずるのは此点である。所謂神男女狂鬼の作品にのみ接して後此の自然居士の如きものに出合はすと勸工場を出て新たならしい空氣を吸つたやうな心持で、其作意や清新、其筆鋒や縦横、謡曲の天地にも尚此作の如く綽々として余地を持つて居るかを解する事が出来る。次第、道行、クリ、

十二月、

「謡曲放談会記事」に『竹雪』の狂言方について発言。
サシ、クセと極つた形を具へたものもよいが、極つた形を具へたもの、みが謡曲と心得てゐる人には此自然居士の如きは反省の好材料として薦め度く思ふ。或は謡曲はもと自由に諸方面に発達してゐて此自然居士といふやうなものも出来たのが、後には此種のもものは跡を絶ち、ありふれた神男女狂鬼の類のみが続出したのかとも思はれる。若し今後謡曲を新作でもせんと思ふ人があるなら宜しく此点に三思すべきである。▽

△狂言が交らなくては意味の通ぜぬ能は数々ある、班女の如きもあの遊女屋の主婦が狂言方であるところが却て面白い、此如き作が能楽のうちにあるといふ事は其単調を破つてゐるといふ点は重きを為すに足る▽

明治三九年

三三歳

六月、

「能楽」に「演能会第四回」執筆。（観世鐵之丞の『藤戸』評）

△余は嘗て今の能役者を試に四つに分類した事がある。其は昔の上手、昔の下手、今の上手、今の下手の此の四階級で、昔の上手が最上位に

九月、

ある事、今の下手が最下位にある事は申す迄も無いが、昔の下手と今の上手とどちらを上にくかといつたら、余は断じて昔の下手の芸の方を上に着く。これは老人の芸には年齢の功で自然に錆が出来ののも一つの原因であるが、更に大なる原因は維新前ののんびりした氣風と今日のせ、つましい氣分との相違より、自然芸の上にも影響して、昔の芸風は雄大、今の芸風は小巧といった傾きを生じ、又昔の稽古は我意を出すことを惡み、型を無限に重んじ、且つ巧者を排斥して唯習練を専一としたのに今の世話しい世の中では例へ昔風の性質を具へた人間でも兎ても昔の人ほど悠長な愚直な稽古をして居る事は出来ず、まして小利巧な人に於ては唯器用を以て能事了れりとする傾きがあつて、兎ても昔のやうな重みのある、深みのある役者となる事は出来ぬに原因する▽

「ホトトギス」及び「能楽」に「金剛催能素人評」執筆。（桜間伴馬の『藤戸』『松風』『自然居士』『金剛謹之助』『道成寺』『雲雀山』『橋弁慶』についての評）

△桜間氏の芸は玉の如しだ。堅い、丸い。みがきにみがき、磨りに磨り、温然として覇氣を収め、

阿弥十六部集』として刊行。

明治四三年

三六歳

六月、
「太陽」に「素人能所感」を書く。

明治四五年

三七歳

同月、
「文章世界」に「鼓の胴」を書く。
「能楽放談会」に型・謡・囃子のいずれが最も大切かという問題について、△こりや程度問題でせう。能の印象が形と囃子と謡と：つまり見るものと、聞くものとの何れが強いかは、ハツキリ決定する事は出来ません、然し見た事は、後に至つて再現し易く、耳からくる印象は再現しにくい、要はこれ等の関係でせうな。▽

明治四〇

三三歳

一月、
漱石を訪い、謡をうたう。

三月、
「ホトトギス」に「楽屋」を書く。演能当日の楽屋で昔の恋敵と出会うという短編。

明治四一年

三四歳

一月、
漱石を訪い、謡をうたう。

八月、
池内信嘉の尽力で、松山、萱町公会堂で三流合同の演能開催。（以後、明治四三年四月、大正三年六月などにも）

明治四二年

三五歳

三月、
漱石と『土車』を、五月、『黒塚』を謡う。

この年、
池内信嘉、吉田東伍が発見した世阿弥伝書を『世

神能が面白くないという発言に対して、△何れにしてもかういふ論は傍に芝居といふやうな比

五月、

較の対照を置いて考へるから起こることで、若し芝居を無いものとして、能楽と一層古朴な神楽とのみが存在したと仮定したなら又自ら論法が異なつて来るに相違ない、要は比較の問題だ、そう徹底的に論すべき問題ぢやないやうだ。神能より二番三番と鬼に至るまで結局尽く能なのだ▽

「能楽放談会」で嫌な能について、△ワキの主として働く能は何うも面白くありません。これは他の人がいふよりワキ流を汲む僕のいふのが最も有力で、且つ至当であるやうに考へる、勿論幾つかの除外はありますが、大体に於て消極的である脇が、積極的に働く場合に、能の趣きは非常に減殺されるやうに思ふ。「嫌やな能」に対するこれが僕の大体論です▽△譬へばワキは庭なり坐敷なりの置石や床柱のやうなもので、此石や床柱が他の樹木や装飾品と調和がとれて居らねば甚だ妙なものになる、目立たぬ範囲で、調和を保つて居つてこそ全体の風致が一層良くなつてくるので、若しこの石が特別に働いて居つたなら、却て打ち壊しになつて了ふ、何うも何処までも消極的な所がワキの本来であるやうです▽

大正二年

七月、

八月、

一月、
五月、

『道成寺』について、△作曲の技倆は何うか知らんが文章としても詮らんし、又見て居つても面白くない、私も此曲は随分譯山見た積りだが、六平太の鐘入りを美しいと見た位のもので、何時も興味索然たるものです▽△芸術的に見て、老女もの、能楽道でいふ秘伝ものには一体に興味のないものが多いやうですが如何なものだろう▽

『清経』について、△あの時代のデカダンで面白いものと思ふ▽

雑詠を復活。以後、平明、季題趣味、定形を説く。

「能楽」に「天水桶と桜井のコオさん 幼い眼に残つた東雲様のお能」を執筆。

三八歳

健康を損ね、いよいよ能に親しむ。

「能楽」のアンケート「見たき能と面白かりし能」に△私にはこれといつて別段な望みもあのません。何の能でも特別に下手な人のでない限り、片つ端から見たいと思ひます。但しこれには少し計り小書がつきます。一、私の気分が能を見たいといふ様な、おちついた静かな日に限ること。二、現在ものだけは絶対にお断りのこと。

つまり言い換へれば、能の趣味と調和する様に

私の気分が動いてゐる日なら、現在ものでない限り、どんな能でも面白く見られるといふのです。自然そんな日にゆつくりと、曲に注文はありませんから、静かに能を見せて下さい。これまでの中、最もおもしろく印象された能といふのは、ゆつくり考へて見たらいろいろあるでせうが、差し当つて頭に浮ぶのは、野口政吉の弱法師（宝生会で見たのですが、年月は記憶しません）と、少し平凡な様ですが、喜多六平太の巴です。ワキでは宝生新の融のワキ、これは前に蟻通のワキを演つて相当に面白かつた所へ、続いて此ワキを勤めた時のこと、つまり、十分の力を以て八分の芸を易々と勤めた余裕ある芸の力に敬服したのでした。前の蟻通は十分の力で十分の芸をしたのですが、融のは八分の芸で十分の力で演じたのです、此二分の余裕に言ひ様のない芸の妙味があつたのでせう、年月は同じく記憶して居りません。▽

六月、

飯田町、喜多舞台にて「ホトトギス」二百号記

念能を催し、泉鏡花、与謝野鉄幹・晶子夫妻、柳田国男、志賀直哉、森鷗外一家などを招待。

「ホトトギス」六月号増刊に、この催しが実現

するまでの経過、能の見方などを詳述。

十二月、

「能楽放談会」で、△極端に刺戟の強い、隅から隅まで突つ、き廻さねば承知の出来なかつた西洋人にも、近頃大分解つた連中が出来て来ましたよ、現にロダン翁の彫刻などは余程日本的に傾いてゐるといふ事です▽△由来四畳半の屋根の下で天地の侘びを味うといふ所に極端に日本式な所があるのですから、仕懸は小さくとも内容は非常に大きなものです▽△畢竟するに十七字詩と能楽とが日本の芸術を代表したものと言へますな▽△樂堂君は日本の仕懸は小さいと言はれたが、僕は必ずしも然うぢやないと思ふ。奈良を見て解るが、昔はあの春日山を公園の山として取り入れたものであつたらしい。今日の日比谷の様な細かいものが作られるが、あの奈良全体を公園として三笠山をその中に取入れた所などは実に雄大なもので、決して小規模と言ふ事は出来ない。▽

大正三年

三九歳

一月、

松山、東雲神社での宝生・喜多連合婦人素謡会、囃子会に出席。

同月、

「能楽放談会」で『藤永』について、△一体藤永

は謡としてよりも能の面白いものですな、読ものとしても舞台上で演ずるものとして面白い、

…こんな事を言へばすべての能は皆然うしたものだから、能全体の弁護になるかも知れないが…然し後世に出来た能以外の作物を見ると読ものとしては面白いが舞台にかけると何れもつまらないもの計りです。殊に近頃の脚本など、なると読んで見ると感心するものは相当にあるが、それを舞台で演ずるとなるとカラお話にならぬものが多い、その点から推すと、読んで見た時の興味よりも舞台上に上せた時の方が遙に面白い。藤永の如きは古い、そして能らしい作と言ふ事が出来ませう✓

二月、
「能楽」に、「新しい六平太氏」を執筆、天才肌の芸と自分を知るの明を称賛。

鎌倉能舞台の建設を同士と着手。

四月、
同月、
「能楽放談会」の「前書」に、「シテ虚子氏、ワ

キ碧梧桐氏、俳句界新旧両傾向の親玉を熊坂と旅の僧に見立て、地を謡つたのは一寸愉快だった。」

△或人が、舞台上の事はすべてワキの頭に浮んだ事に過ぎぬといふ事を言つたが、私はそれを非常に面白い事と思ひます✓

六月、
池内信嘉主催の能に参加のため、松山へ。『熊野』のワキを勤める。（シテは桜間金太郎）

七月、
鎌倉能舞台完成。二六日―二八日の三日間、舞台披露を催す。虚子は能『玉葛』のシテ、『乱』のワキ、『田村』の大鼓、居囃子『高砂』『安宅』『融』『紅葉狩』『松風』『三井寺』の大鼓、『花月』の小鼓に出演。爾来、関東大震災に逢うまで、毎月数回囃子会、年に二三度の演能を行う。

九月、
「ホトトギス」に「鎌倉能舞台の記」を書く。

十一月、
「能楽放談会」で能の改良の余地について、△改良すれば能楽が終には壊れるといふ点から絶対に現状維持を（雪鳥が）主張されるのかと思つてました✓△すると君の説は価値の問題ではなくつて、能楽政治上の問題なのですね、価値は不完全でも壊れるのが怖いと言へば之が維持、保存といふ事にのみ腐心する能楽政治家といった傾きになるぢやありませんか。改良して見て、十目の見る所価値ありとすれば何もそんなに懸念するには及ばんぢやありませんか✓△若し此処に世阿弥がゐて改良するとなればご異議はないのですね、現に先刻の玉井の天女の問題なんか誰が見ても可笑しな事ぢやあるし、改めたつて些とも差支へないぢやありませんか✓△試み

大正五年

四〇歳

として改良して見るだけなら差支へないぢやありませんか、直ちにそれを実行するのでなしに唯試みるだけなら：▽△要は試みる人の技量如何による事だと思ひます▽△全体坂元君の説は自分を信じてない説ですね、それも面白いですが、又自分を信じて又改良を試みて見るのも面白いぢやありませんか▽

一月、六日、鎌倉能楽堂でタンダジールの死の翻案『鉄門』上演。

一月、二五日、「東京日々新聞」に「新作能試演所感」(一)を執筆。

二月 一日～四日、同じく(二)～(五)を執筆。(「能楽」二月号に転載)

△私は能は新作すべからざるもの、改良すべからざるものといふ意見に反対である▽△二百番の能楽全部を改良すべきものとも考へないが、然し其中若干のものは十分に改良の余地があるものと思ふ。更に歩を進めて言へば、能楽全体を提げて、今少し異なつたところへ持つて行くことも出来ないことはあるまいと思ふ。然しこれは為す人の手腕の問題である。つまり口舌の

人が机上で論すべき問題ではなくて、力瘤の隆起して居る大手腕の人が實際的に行つて見なければ解決しない問題である。芸術家として立派な頭を持つた上に、能楽の総ての知識を具備し、自ら所演する人でなければ出来ぬことである▽△世阿弥のやうな人が出て来ねば出来ぬことだといふと、そんな人が容易に生れるものではない、世阿弥が出て来ねば出来ぬといふことは、とりも直さず改良が出来ぬといふことである、といふやうな説を立てる人が必ずあるであらう。それは卑怯な愚者の説である▽△われ等所で勉めさへすれば、世阿弥位になることは、それほど困難なことでもあるまい。世阿弥以上になることも不可能なこと、は考へられない。私等は芭蕉以上、蕪村以上の積りで俳句を作つて居る。少くとも芭蕉以上、蕪村以上になる積りで俳句を作つて居る。それ位な抱負がなくなつて明治大正の文芸家といふことが出来やうか。能楽としても同じことで、最うそろそろ度胸を大きくして世阿弥以上の人間になる積りで努力する人が、一人や二人は欲しいものである▽△然しながら、能楽改良といふことは實際的に言ふと能楽新作といふことよりも遙に難しいことである▽△私

は自ら隗より始める積りで、新作を試まうと考へついたのは一昨年の夏のことであつた▽△それは鎌倉に能舞台の出来るといふことが大なる所縁となつたのである▽△又それが黒人の舞台でなくつて、素人の舞台であるといふことの上に新作試演といふ本来の性質にふさはしい点がある▽△頗る不遜な言ではあるが、坪内博士の所謂舞謡劇なるものが、単に文学者としての博士によつてなされたことを、いつも残念に思ふのである。これは是非とも博士自身が踊も踊り、浄瑠璃も語り、三味線も弾き、万事自分でやらねば出来るものではないと考へるのである▽△能楽を作る言つたところで、決して継ぎはぎ細工で出来るものではない。矢張作者の秀でた感情に俟たなければならぬ。（中略）今までの能楽はさういふ点に向つて余り論ぜられて居ないやうであるけれども、今後新作せらるべき能楽は、是非とも此枢要な条件を忘れてはならぬ。さういふ意味に於てこれを黒人の能役者に俟つことは前途頗る遼遠とせなければならぬ。能役者中に文筆の士を俟つよりも文筆の士の中に能楽の知識のあるのを俟つ方が或は妥当の考へかもしれないぬ。少くとも實際的の考へであらう▽

二月、二二日―二四日、「東京日々新聞」に「能楽雜記」

（一）―（三）を執筆。（「能楽」四月号に転載）宝生流の謡の「語りの要素」を買い、これを名人九郎の創意ではないかとし、その弟子の長の『望月』の評に至る。

三月、「ホトトギス」に「机上観能」として、新作能『鉄門』を解説。三月十九日の再演を前に、手直しを加えている。

七月、十六日、二三日、「東京日々新聞」に「能楽雜話」を執筆。（「能楽」七、八月号に転載。△大概なものに異なつた二つの道がある。能楽にもそれがある。一つは極めて正確に規則を遵奉してやらうとするもの、他の一つは必ずしも規則に拘泥せず、芸術的の効果の多いことを志すもの。（中略）左陣翁等の教育方針は味ひにある。九郎翁の教育方針は正確にある。この二つは車の両輪の如きもので決して一をとつて他を捨つべきではない。▽△例ひ其翳し具合は同一であつたとしても、其の翳し具合が味ひがあるとして教へるのと、正しい道であるとして教へるのと、その精神に於ては非常の相違があるといはねばならぬ。正確本位の教育法は往々生硬な潤ひのない弟子を作ることはあるけれども、軌道を踏み

外すやうな危い弟子を作る心配はない。それに反して扇を斯くり如く翳し拍子を斯く踏むのは、必ずしも規則によるといふばかりでなく、斯く翳し斯く踏むことが最も味ひがあるからだ、といふ風の味ひ主義の教育法は、往々にして早呑み込みの、心持ばかりあつて腕の伴はない、半可通の弟子を作ることがあるが、時には又ズバ抜けた天才的の、出藍の誉りある弟子を作ることが出来る。＼＼十の潜勢力を養つて、十分に習練を積んだ上に全力を一の芸に傾倒するのと、四五の潜勢力を二つも三つもの芸に分つとは大変な相違である。＼＼長い間師匠なり先輩なりの増鎚下にあるといふことは、其人の鋭気を挫いて小さく固まらして仕舞ふといふ非難があるが、それは寧ろ少数の例であつて、厳格なる師のもとに長く陶冶されたものは其間十分の鍛練を経て他日延ぶべき時が来た時に非常な勢を以て一時に延ぶことが出来るのである。＼＼幾ら天才の芸術家でも鏡を見ずに自分の姿態の醜を瓢別することは容易なことではない。再びそれを鏡に映して見れば今迄気のつかなくなつた点に沢山の醜惡な点を見出して初めて改めることが出来るのである。師匠を失つた芸術家は初めは

自分の思ふ存分に十分の力を延ばすことが出来るので非常にのびのびした立派な芸を見せるやうであるが、その欠点を指摘して呉れるものがないので師匠を持つて居る人ほど十分の陶冶が出来ぬ。＼＼『鉄門』に対する多くの人の批評は、もつと旧来の多くの能のやうに、華のある文字を使用し、和歌や故事を引用し、諷詠して面白いものにせないかといふ事に一致してゐる。(中略) 元來私は諷詠する能よりも寧ろ意味を語る能を作つて見度いのである。花のある文字を使用し和歌や故事を引用するよりも、唯事件を運び意味を語る率直の文字を使用して見度いのである。くさぐさの綾糸で錦繡を織り出すよりも一色若くは二色位で素朴な糸で手丈夫な綱が作つて見度いのである。其は能楽にならぬといふ議論は一応受取るが再応は返却する。なるかならぬかは遣つて見ねば判らぬことである。＼＼ワキが働く能は大概詰まらぬ能だと言つた。其は誰あらう私が言つたのである。ワキには科はあるが舞が無い。ワキの主になつて働く能は主に意味を語り事件を運ぶだけの能である。詰まらぬと言つたのは其処に基くのである。けれども今の私は「其も遣りやうによる事であつて決し

て詰まらぬものと一概に断定することは出来無い」と昔の私の言に反対しやうと思ふ。▽

大正六年

四一歳

四月、

内藤鳴雪古稀祝賀能に出演。碧梧桐のワキで『自然居士』を舞う。

大正七年

四二歳

四月、

『謡と能のかげぐち』刊。（坂元雪鳥編、鳴雪、碧梧桐、醒雪、楽堂らと）

七月、

「能楽」に「金子亀五郎君を悼む」を執筆。

十月、

「ホトトギス」に「どんな俳句を作たらい、か」を連載。（大正七年 七月まで）能と俳句とを関連づけ、俳句の根本としての有季定型説明をする。

△相撲に土俵といふものがあり、能楽や芝居に舞台といふものがある（中略）相撲は勝負を争ふ技であるが、純粹の芸術であるところの芝居とか能楽とかいふものにも矢張り限られた舞台があつて、芝居の方は少々広狭いが自由であるにしても、それでも凡そ其広さに制限があつて、花道其他の布置の具合にも夫々の自らの定まりがある。殊に能楽の舞台に到つてはちゃんと定

まつた寸法があつて容易にそれは動かすことの出来ないものとなつてゐる。舞台は三間四方、脇座、後座、橋掛等はこれに準ずるものとなつてゐて仮令場所其他の止むを得ない都合から幾らか舞台を狭くせねばならぬことになつたとしたところで二間半四方より狭くすることは出来ない。又幾ら場所が広いにしても三間四方以上の舞台を造ることは出来ない。なぜかといへばもともと能其物が二間半以上三間以下位の舞台でなければ演ずることの出来ないやうに出来上つてゐるからである。若し舞台に制限がなくつてどこ迄行つても境がないものになつてしまつたら、能といふものは根柢から破壊されてしまつて、古人が苦心した方は固よりのこと、作曲全部其物が無意味なものとなつてしまふ。これも相撲の土俵と同じことで、何等かの必要から現在の舞台を少々広げ、もしくは少々狭めてそこに新能舞台を造ることは必ずしも出来ない相談ではなくつて、能役者はその若干広がつた、もしくは若干狭まつた能舞台の上で、種々工夫を凝らしたならば、或点まで従来の能の趣味をぶち壊さないで演ずることが出来るかもしれぬ。然し乍らそれにしても一定しないで俄に狭くな

つたり広くなつたりするのは、能の基礎を危くするものであつて、三間四方がいけないものならば二間半四方とか、三間半四方とか、ちゃんときまつたものにせなければ演技者はいつも其広狭に迷つて、戸惑ひばかりせなければならぬやうになる。(中略)総て芸術といふものは或定まつた約束の中にあつて、そこに漢詩とか和歌とか俳句とか能楽とか芝居とか絵画とか彫刻とかが存在して居るのである。此約束といふものは、一方から考へると窮屈のことであるけれども、然し「これあることによつて始めて或る名前のついた特殊の芸術がある」と考へる時は、それは非常に力強い一個の金城鉄壁となる。俳句の字数が十七と限られて居るといふことは、窮屈のやうに考へる人も多いであらうけれども、此十七といふ字数の制限がある為に始めてこゝに俳句なるものがあると考へることは、此俳句を広い文芸界の中にある或特殊の文芸として考へる上に力強い一個の標識となる。V/A相撲の土俵にしても、能や芝居の舞台にしても、昔から全く変化がないといふことは言へない。第一、野見宿禰時代には土俵といふものがあつたかどうか。仮にあつたとしたところで、今の土俵の

大ききであつたかどうか。其後になつたところで土俵の形や広狭には幾多の変遷があつたに相違ない。又能や芝居の舞台にしたところで昔と今日とでは大分違つたところがあるに相違ない。能の舞台の如きは成るべく昔の形を守るやうにしてゐるにしても、第一橋掛りの位置などは幾変遷して居るといふことを聞いて居る。そこで論者は必ず斯ういふことをいふであらう。俳句も亦其通りであつて、和歌から連歌になり、連歌から俳諧になり、俳諧の発句が独立して終に今日の俳句となつた、斯ういふ変化は尚ほ今後も繰り返されねばならぬ。十七字の俳句が十四字の新俳句となり、もしくは二十二三字の新俳句となるといふことは、寧ろあり得べきことであつて、さう変化するといふことを庶幾するのが寧ろ当然といふべきである。俳句はどこ迄も十七字でなければならぬといふ議論は迂遠な議論とせなければならぬ。と論者は必ず私の説を駁かること、思ふ。一応尤もな説のやうであるが、却て其方が迂遠な議論である。和歌が連歌になり、連歌が俳諧になり、俳諧が今日の俳句となつたといふ其変遷は、一の詩形が別の詩形を産んだといふ事実であつて、他の新詩形を産

んだが為に其母体である旧い詩形が亡びてしまつたのではない。新詩形と旧詩形とは並び存して行はれつゝあるのである。連歌とか俳諧とかいふものが、今日余り行はれないといふのは、別の理由によることであつて、新詩形を産んだが為に母体が無用のものとなつてしまつたといふのではない、其一番最初の母形であるところの和歌は一番の新しい詩形であるところり俳句と並び存して世に行はれてゐるといふことは最も強い意味で其事実を物語つてゐるのである。さういふ意味で今後俳句から更に何等かの新しい詩形が生れて来るといふことは私も必ずしも絶無のこと、は言はない。然しながらさういうことがある為に十七字詩形が亡びてしまはなければならぬといふ理由はどこを探しても見当らぬ。新詩形を創造することは、之を創造する人の自由である。然し其為に旧詩形を時代遅れのものとし、若くは滅亡すべきものとするのは迂遠の見といはねばならぬ。V／＼詩は何の制約も受けないで自由に其志を咏ふべきであるから、抑も俳句に季題なる煩はしい約束を設けたことが間違つてゐる。といふ議論も成り立たぬことではない。然し乍ら其議論も亦一を知つて二を

知らぬ議論であつて、これを相撲や芝居にたとへれば、相撲は裸になつて鬘を結つて、まはしを締めるといふ特別の約束がある。能楽は歩むのに必ず擦り足をして、囃すのにき必ず大、小、太鼓、笛の楽器に限られてゐるといふ約束のもとにある。それ等の約束といふものは一方からいふと不便不自由なことであつて、もつと自由にして、相撲は必ずしも裸でなくつてもいい、ことにしたらよからう、能の音楽は大、小、太鼓に限らぬことにしたらよからう、其方が幾ら自由に分らぬといふ説も、説としては成り立たぬことはないが、然し其不便、不自由はやがて相撲とか能とかいふものを、或る特殊の技術なり芸術なりとして、他のものの、侵すことを許さない存在の顕著な理由となつてゐる。相撲が裸でなくつてもいい、ことになつたらば、それは相撲其物の特殊の価値を減ずることが幾何であるか知れない。能にヴァイオリンやピアノを持ち込むことになつたらば、それは能其物の特殊の価値を減ずること幾何であるか知れない。不便とか不自由とかいふことは如何なるものにもあることであつて、一面に不便不自由であることが、他の一面に其物の存在を力強く説明して居る特

殊の価値であることを知らねばならぬ。俳句に季題がある為に自分の感情を詠ふのに不適当であるならば、其場合俳句は作らずに、其感情を詠ふのに適した他の詩形を探し求めればよい。

其の不便の為に俳句の季題を無用とするのは、俳句が文学界にあつての特殊の一文芸であるといふことを忘れた議論である。俳句が広い文学界に在つて特殊の地位を占めてゐるのは十七字といふこと、季題趣味を土台としてゐることを忘れた議論である。V 義太夫の文句でも謡曲の文句でも、単に散文としてこれを読んで見ると、陳腐な文句、平凡な文句、浅薄な文句であるものが、一旦三味線なり鼓なりに合はせて朗吟されると、それが散文として読んだものよりも遙かに価値のある、深みのある、強みのあるものとして頭に響いて来る傾がある。たとへば謡曲の鉢の木の道行の文句にしたところで、「信濃なる浅間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井川、下す筏の板端や……」と言つたやうな文字の行列で殆ど地名を並べ立て、其に立つ煙とが吹く嵐とか言ふ景物を点綴したに過ぎない。文としてこれを見た場合には殆ど無価値の文字とせなければならぬ。只然乍一旦節付けさ

大正八年

一月、

二月、

四三歳

れて、それが音楽の色彩を加へて朗吟される段となると、そこに信濃路の光景が自らに想像され、一箇の旅僧が寒げに其間を旅して行く情懷が滲み出て来るやうに思はれる。(中略) 是等はすべて韻文の特別の価値であつて、散文にするならばもつと鋭い細かい言葉をして十分に描かねば表はすことの出来ない情景を、比較的平凡な、比較的簡単な言葉で表はして其効果を散文同様に納め得るのである。和歌や俳句が散文に比べて力強い点もこの韻文的なところにあるV

「中央公論」の委嘱で、新作能『実朝』を發表。この年が、実朝没後七百年に当たることからの委嘱であらう。

「能楽放談会」で、『実朝』について語り、意見を聴く。前書に「此夜久し振りに虚子氏が出席されたのは嬉しかった、氏は放談会の記事が面白すぎるといふので出なくなつて居られたが、近來拙者が書くやうになつてから一向面白くないものになつたので、又出て見る気になられたらしい。」と坂元雪鳥が書いてゐる。「道行」の文句、実朝の歌の裁入れに称賛が集まる。△カ

大正九年

十月、

軽い脳血栓を患い、以後、禁酒。

四四歳

ケリにした理由は、実朝の短い生涯は斯ういふものだったが、勤王の志があり尚武の念も強かつたといふような所から、何うも舞ではなくカケリにしたくなつたのでした。問題は後のクセですよ、是で型が付きませうか、夫も面白く鋭くて其上に在り来りの型と違つた型が欲しいと思ふのです。公暁の所などは思ひ切つて強い型をと思ふのですが、夫が附けば宜いけれども怪しいと思つて居ます、夫から初冠とも思つたのですが、是は何うも風折になるでせうね、△一
体短いから、鋭い型が欲しいのです、後シテは颯爽たる所を見せて直ぐに済むものにしたいのです。夫が出来ねば駄目です。前は極り切つてますから、此能の成功と失敗は一に後のクセに思ふような型が附くか附かぬかによりて定まるものと思います、

同号所載の『実朝』には、こういうものにした
いという腹案のみで、後に、野村万蔵により狂
言小舞の型が付けられたアイの詞章がない。

大正十一年

四六歳

四月、池内信嘉「能楽旬報」を創刊。

十一月、鎌倉能舞台で、物故会員の追善の意味を込めて、

「隅田川」を舞う。

十二月、「ホトトギス」に、演能の感想を交え「隅田川」

を書く。△素人芸は技術が経たでも心持は十分にあるから、その点で面白く見られると。私は常にこの言葉に疑を持つてゐる。若し果して其の素人の芸が、さういふ意味で面白く見られたとすれば、それはやはりその人の心持を現はすだけの技芸がその点に達したものであるだろう。玄人の頭の中はからつぽで、たゞ師匠に授かつた通りの型をしい居るものに比べたら、いくぶんか心持の点で見られるといふ傾はあるだろうけれども、併し、技芸がだめであつたら、とてもその心持は出せるものではない。されば技芸が一分進歩すれば一分心持が出せる。俳句も亦同じことである。この意味に於て心持を人に伝へるといふのは、技術の習練に在る。習練された技術は柔かに、豊かに、ふつくらと、潤ひを持つて、而も鋭く、強く、その心持を人に伝へるものである。△この「隅田川」の如きは、人間の悲惨事を悲惨事として取り扱つた曲であ

つて、この母親の如きは絶望の極を以て終りを告げる。珍しい曲には相違ないが、能楽としては破格なものである、といふやうな説を唱へたことがある。人生の悲惨事を描くことは、正に説者の説の通りであるが、これを以て能楽の真面目でないといふ説は、俄に首肯することが出来ない。或ひはこの種の方面に発達しようとして、而も能はなかつたものかも知れぬ。近代の文芸が悲惨事を悲惨事として描いて、何等怪しむことが無いのから思ふと、この「隅田川」の曲の如きは、近代文芸に一步を先んじたものとも云へる。✓

大正十二年

四七歳

九月、関東大震災に遇う。鎌倉能楽堂倒壊。

大正十三年

四九歳

五月、細川邸の舞台で『弱法師』を舞う。

七月、「ホトトギス」に「弱法師」を執筆。五月の演能を「破魔弓」の人々が見学するので、その解説をしたものの筆記。

十一月、名古屋へ赴き、『阿漕』を舞う。

大正十四年

五〇歳

四月、細川邸の舞台で『熊野』を舞う。

大正十五年

五一歳

二月、「ホトトギス」に『能楽雑誌』を読む。
八月、「ホトトギス」に『能楽盛衰記』下巻の跋。

昭和二年

五二歳

四月、松山へ。帰省中の池内信嘉とともに演能に参加。
六月、「山茶花」大会の席上、初めて花鳥諷詠を説く。

昭和三年

五三歳

五月、細川邸の舞台で『歌占』を舞う。

昭和五年

五五歳

十二月、俳能会を催し、華族会館舞台で『善知鳥』を舞う。

昭和九年

五九歳

五月、兄、池内信嘉、没。

昭和十年

六十歳

八月、「ホトトギス」に「私の謡」を執筆。
十月、松山へ。兄の追善能に参加。

十一月、『髪を結ふ一茶』を中村吉右衛門一座が上演。

昭和十四年 六四歳

？月 日本放送協会の依頼で、舞囃子『青丹吉』を作詞。
桜間金太郎作曲し同氏が放送。その後、型も同氏が付ける。

昭和十五年 六五歳

十一月、日本放送協会の依頼で、『時宗』を作詞。紀元二千六百年を記念して、桜間金太郎の演能をラジオ放送。（十六年十二月、十七年二月、三月に再演）

同月、新作舞囃子『青丹吉』の謡本刊行。

昭和十六年 六六歳

十一月、『時宗』の謡本刊行。（わんや書店）
この年、川瀬一馬、生駒宝山寺にて、金春家旧蔵の世阿弥自筆文書を多数発見。

昭和十七年 六七歳

四月、観世会の委嘱で、『義経』を作詞。放送、のち数回演能。
六月、『能楽遊歩』を出版。

七月、『能楽全書』（野上豊一郎編）の第三巻「能の文学」に「謡曲と新作」を執筆。

八月、『義経』の謡本刊行（檜書店）

九月、『時宗』を芝居として、中村吉右衛門一座が上演。

（於、歌舞伎座。翌年五月、南座でも）

十月、新作長唄「脇僧」がラジオ放送される。

昭和十八年 六八歳

十月、日本放送協会と日本文学報国会の委嘱で、『奥の細道』を作詞。

芭蕉二百五十年忌記念作品。十月十日、桜間金太郎らがラジオ放送。（翌月、わんや書店から謡本刊行、翌年、宝生会で演能）

十一月、中村吉右衛門一座が「嵯峨日記」を上演。（於、歌舞伎座）

昭和十九年 六九歳

三月、『奥の細道』『嵯峨日記』などを出版。

昭和二十七年 七七歳

三月、この月以降、没年に至るまでの「句謡会」の記録は、山田凡児『虚子先生と句謡会』に詳しい。その嚆矢は、大正九年十一月、坂本雷鳥、山崎

楽堂、池内たけし、斎藤香村らの提唱で、各流の謡をたしなむ俳人たちで句会と謡会を同日に行う会を作ることになり、東京、牛込の山崎楽堂宅で開かれた。その後、まもなく参加するようになった虚子を中心となり、謡の流儀は、次第に宝生流に統一されて行つた。⁽³⁾他に句会と謡会を一緒にした催しには「みそか会」「宝文会」などがあり、宝生流の能楽師だけの句会「七宝会」というのもあった。

昭和三四年

八四歳

三月、

皇太子成婚祝賀曲として、舞囃子『花一時に

開く』を作詞。

四月

一日、脳幹部出血にて倒れる。

八日、永眠。

没後、『奥の細道』『実朝』『青丹吉』、歌舞伎の『髪を結ふ一茶』が、「ホトトギス」一千百号記念、千二百号記念、創刊百周年記念などの折に、桜間金太郎、野村四郎、桜間右陣、片岡我當などにより、上演されている。

注

(1) 「能楽に遊ぶ」長尾一雄『虚子物語』昭和五十四年七月 有斐閣所収。

(2) 「虚子の京都」西村和子 平成十六年十月 角川書店など。

(3) 『斎藤香村句集』斎藤繁編平成十六年九月 角川書店。